

地域交流センター通信

vol.02

特集
ムササビの住むキャンパス
ーフィールド・ミュージアムの夢



Contents

〈交流〉あるいは
〈ネットワーク〉ということ 都留文科大学学長 金子 博 2

特集 **ムササビの住むキャンパス**
ーフィールド・ミュージアムの夢 4

半期の活動を振り返って

地域総合学習開発プロジェクト	14
甲斐の文化活動研究プロジェクト	15
高等学校と大学の連携	16
教育相談活動	17
山梨の魅力メッセンジャー認定講座	18

トピックス 19

写真:森のなかでアカネズミとの出会いを楽しむ。ガラスの箱が
エンカウンター・スペース(4-5頁に関連記事。Photo/北垣憲仁)

都留文科大学
地域交流研究センターとは？

地域交流センターでは、地域に根ざし地域
と共同した活動を推進し、つぎのような取
り組みをおこないます。

- 1)地域交流に関するプロジェクトの推進
- 2)学校の先生方などの教育相談
- 3)地域のニーズに応えた貢献活動
- 4)さまざまな地域交流の連携の推進

題字：黒部行子

〈交流〉あるいは 〈ネットワーク〉 ということ

都留文科大 学長
金子博

八月二日の夕刻、今泉、北垣両先生の案内で、大学の裏山にある今泉先生の〈観察小屋〉の辺りまでフィールド散策をしました。同行者は、森、畑両先生と畑先生のお嬢さん。梅雨明けの、さわやかで気持ちいい日でした。総合運動場裏の道路から繁みに入り、ゆっくり二〇分ほど細い道筋を辿ったでしょうか。道々、今泉先生から、この道筋一本がどれだけ多くのことを語るか、生きた教室であるかを教わりながら、久しぶりに地面の感触を味わいました。帰る頃には、月見草*が今咲いたところだという風情で、空には上弦の月がほどよい明るさでかかっていました。

浅い谷筋の道はおおかた雑木林ですが、所々に桑の老木、巨木がありました。この地域の昔の人々の暮らしの名残りでしょうが、確かにそこに、この地の自然と歴史と文化があるわけです。

一角に植林した杉林もありましたが、手入は不十分のようでした。過密すぎて根を十分に張れず、見上げると高い梢の先端がかすかに揺れ動いているのがあります。いずれ倒れて死に行く木だとのこと。この地の林業も昔どおりではないことが直ぐに見てとれます。不気味に音もなく揺れている梢を見上げながら、生者と死者の〈交感〉〈交流〉というようなことも感じていました。この見捨てられた林から何を読み解き、どう事態を解決するかという現実のことになると実に複雑かつ面倒なことになるとい

ことも直ぐに感じられました。どれだけ多くの知恵と行動が必要になることか。どこから手をつけるかを考えるだけでも気が遠くなりそうなくらいです。しかし、先ずは多くの人々がこの木に出会い、その痛々しさ、悲鳴のごときものと〈交感〉〈交流〉することが全ての始まりでしょう。そして次に、人と人が話し合う、知恵を出し合う、そのネットワークが生まれなくては事は一歩も前に進まないでしょう。人と自然の〈交流〉といっても、その時、人と人との〈交流〉がなければ何事も生まれません。道々、今泉先生は、「地域交流センター」とは、文字通り交流すなわち人と人との、地域と地域との〈交流〉、ネットワークづくりのことだということをご自身の経験を交えて語ってくれました。

大学と地域の人々との〈交流〉（知と暮らしの〈交流〉）、地域と地域の〈交流〉、学び合うこと、そして人と自然との〈交流〉。それは一方流れる、流すということではないから、いずれにせよ根氣のいる営みになるはず。しかしそれが、どれだけ私たちに生きていく活力を与えてくれるか、それだけは信じられるように思います。活力を与えられるという言い方もふさわしくないような気がします。生の営み、あるいはそれを学ぶということは互いに飛び込み、迎え入れて、〈交流〉することそれ自体のことを言うのではないか。あらゆるネットワークを模索し、追求するそのことを言うのでは



夕暮れの散策を終えて。左から今泉吉晴センター長、金子 博学長、畑 真樹子さん、森 博俊センター次長、畑 潤本学教員（写真・北垣憲仁）。

ないか。

さて、〈観察小屋〉では、まだ時刻も早かったせいか、ムササビに会うことは出来ませんでした。それでも生き物の気配は充満していました。小屋の二階を、あれはクマガが壊していった跡だと、事も無げに言う今泉先生。地上に出たところをキツネにねらわれるモグラのために通路を確保してやったという話。イノシシの水浴び場もありました。近くには、細い流れでしたが水もあり、口を含むと、雑味のない甘い水でした。この水が大学まで引ければ確かに、ピオトープを潤してくれそうです。ただそれが実現するには、たくさんの〈交流〉、ネットワークを通過しなければなりません。そのネットワークを作り出す努力、その意義の大きさを「地域交流センター」は追求したいのだと、そんなふうを考えればいいでしょうか。

〈交流〉そしてネットワークづくりは生きることそれ自体のことではないかなどと大仰に言ってみたくはなかったのは理由がありました。この夏私は、本学の同窓会の支部設立に招かれて、高知、愛媛、岡山に行き、福島の支部総会にも行って来ました。福島では帰途、妻の実家の年老いた両親とも久しぶりに〈交流〉し、老いとか家族のことも深く考えさせられました。そのことはさておき、同窓会はまさしくネットワークづくりの場であり、挨拶では大学への支援に対するお礼やら期待やらお願いなどを申し述

べました。出席者は殆んど教員をされている方々ですが、懇親会でのスピーチでは、皆さん、都留の街、人々、自然、そして大学との〈交流〉のことを本心に懐しげに語り、そこで得た友人達の大切なこと、そこで学べたことがどんなに良かったか、それを口々に言ってくれます。都留という街でのさまざまな〈交流〉の体験が、地元に戻ってどんなに活力になっていくかを語ってくれるのです。同窓会は、記憶と今の〈交流〉、地域と地域の〈交流〉、人と人との〈交流〉の意義を実感させてくれる場です。卒業生達の話は、都留という濃密な〈交流〉の場（むろん教員と学生の交流のこともたくさん聞きますが）の素晴らしさを改めて気付かせてくれるのです。あるべき本学の教育と研究のイメージ、アイデンティティーが彼等を通して再確認されるような気がします。

今日は、八月二日のフィールド散策のレポート提出とあったところですので、「地域交流センター」の他のプロジェクトについては触れません。ただ、同窓会に出席して感じたネットワークづくりの意義の大きさは、他の様々なプロジェクトのあり方にも通ずるものだと、そんなふう感じています。

夏の初め、いく分失調気味で、呼吸がうまく出来ないという感じだった体調は、八月二日の小散策と同窓会行きで元へ戻りました。交感神経と副交感神経が、自然と人々の中でうまく〈交流〉したのだと思います。

ムササビの住むキャンパス

—フィールド・ミュージアムの夢

都留文科大学のキャンパスの森にはムササビが暮らしています(わたしたちは、ここを「ムササビの森」と呼んでいます)。今年、この森のヤマハンノキに天然の洞(うろ)を発見し、ムササビがキャンパスに定着できる環境が長い年月をかけてようやく整ったことを知りました。ここでは、動物園や博物館ではみられない、生きいきとしたムササビにいつでも出会えます。このような本物との出会いを楽しめる地域の魅力を高く評価しようというのが、わたしたちの取り組むフィールド・ミュージアム研究プロジェクトです。すでに20年をかけた活動と研究を発展させ、地域の人々の生活の知恵や、シートン、ソローといった本物のナチュラリストたちの思想にも学びながら、さらに幅を広げた活動をしていきます。

プロジェクト担当：今泉 吉晴 (本学社会学科教員)
北垣 憲仁 (本学非常勤講師)



▲「ムササビの森」にできた天然の洞(ウロ)



◀イノシシ (中屋敷にて) 大型獣との共生もテーマのひとつ



▲十日市場の水掛菜栽培 都留の代表的な農業 (9頁)



◀果樹園跡 (8頁)



▲八つ沢の水場



石船神社

フィールド・ミュージアム構想はこの神社のムササビ保護運動から始まった。ここでの環境教育の取り組みも20年をこえる。

都留市全図



カワネズミ

*水中で魚などの獲物を捕らえるモグラ



野ネズミ

*写真右はヒメネズミ、左はアカネズミ

●エンカウンター・スペース
動物の空間要求にあわせた
観察装置。二枚組の写真は、
右が対象となる動物、左が
エンカウンター・スペース

おもなフィールドと観察施設



中屋敷フィールド
*南向きの草原。オオムラサキの楽園



八つ沢フィールド (上の小屋)
*森のなかの草原



水小屋 (Spring House)
*豊富な湧き水。水掛菜栽培を開始



八つ沢フィールド (下の小屋)
*ムササビとの交流をはかるフィールド



大沢フィールド
*溪流に沿って立つ観察小屋



大桑山フィールド
*観察会とともに森づくりが進行中



- 観察施設
- 観察ポイント
- フィールド
- ゾーン0
- ゾーン1
- ゾーン2
- ゾーン3

本物との出会いがある

わたしたちは、森、草原、溪流、湧き水などそれぞれ異なる環境のなかに動物観察の拠点となる観察小屋をつくってきました(地図を参照してください)。同時に、ムササビやリス、野ネズミ、カワネズミ、オオムラサキなど、野生動物と出会える魅力あるフィールドも整備してきました。このような「本物」と出会える魅力あるフィールドを来訪者に見てもらうことで、都留のまち全体を自然博物館にできるのではないかと考えたのです。

また、野生動物の暮らしにあった観察方法も工夫してきました。たとえばアカネズミはわたしたちが野外でじっと観察をしても目の前でクルミを食べることはありません。アカネズミが食事をした気分になる空間が必要となるのです。そこで箱のように閉じた空間をつくれればアカネズミが食事をする気分になる、ということを見ました。ガラスで箱をつくれれば、はっきりと食事の場が観察できますし、アカネズミのくらしにも干渉せずにすみます。これがエンカウンター・スペース(出合いの場所)です。このエンカウンター・スペースは、これまでの博物館の展示に相当するものです。

このように、フィールド・ミュージアム研究のプロジェクトには、野外研究の成果がおおいに活かされています。プロジェクトでは、「本物」に出会える魅力ある博物館を実践をとおして提案していきます。

●ゾーニング
自然に慣れ、親しんでいくゾーンを○(ゼロ)から三まで設定。自然と親しむ入り口をゾーン○、野生の息吹を体感する領域をゾーン三とした。



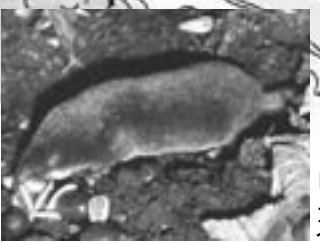
*世界最小のネズミ。草原を好む



カヤネズミ



*世界最小クラスのモグラ。落ち葉の下などで暮らす



トミズ

感性をきたえる



わたしたちのフィールド・ミュージアムでは、「本物と出会う」ことが「もの」とのよい関係を築く基本と考えています。あくまで自分の直感を信じ、さまざまな体験を積み重ね、直感を確信へと変えていく。そして、あくまで自分の目で見たことを大切に育む。これが、「もの」とのオリジナルなよい関係を築く第一歩となります。本物と出会う喜びを本田深雪さん、工藤真純さんの二人に語っていただきました。

開花の感動を楽しむ

本田深雪 ほんだ ふゆき・本学社会学科三年

薄着していても過ごしやすい夜に散歩していると、良く目にする黄色い花。その花の咲く瞬間は噂によると、とんでもなく感動ものらしい。前々から夜咲く花、マツヨイグサの開花をみたいと思いつつも、暗い道端でジッと何かを待つ怪しい人間になりきれなくて機会を逃してきた。そして今年、どうぞゆっくりみていただくさい、と言わんばかりのプレートとともに、オオマツヨイグサが大学図書館前にやってきた。こいつはみるしかない！

六月二七日、とうとうオオマツヨイグサの開花の瞬間をみる事ができた。ゆっくりとガクがとれ、四枚の花びらがはじけるように開いてゆく。完全にパツカンと花が開いた瞬間には思わず叫んでしまう。オオマツヨイグサの開花の瞬間は、噂通り感動ものだった。ふだん目にする植物も、花が咲いたり、背が伸びていたり、枯れてしまっていたり色々な変化があるもの

の、その変化の瞬間をみることはほとんどない。オオマツヨイグサの開花の感動は、確かに植物は生きていると納得させてくれるものがある。それからというもの、マツヨイグサの咲く場所を見つけては出かけていった。もう病みつきである。人には教えない秘密の場所もつくり、蚊の大量にもめげず出かけていった。暗闇に潜む怪しい人間を乗り越えてみると、マツヨイグサにやってくる虫や、話しかけてくる人や、日が落ちる静かな感じなど、さらにいろいろな出会いがあった。



オオマツヨイグサの観察風景（図書館職員の青池千恵子さんが携帯画像で記録したもの）

朝早く出かけなくても、特別な場所に行かなくても花の咲く様子を見せてくれるマツヨイグサはとってもいい。心配なのは、雑草として簡単に刈られやすいということ。ああ、もったいない。

ムササビ観察で学んだ「本物」と出会う喜び

工藤真純 くどう ますみ・本学初等教育学科三年



出会いの舞台となった小篠神社

私が都留の自然に興味を持ったのは、博物館の講義での「ものとのよい関係を築く」というレポート課題がきっかけでした。最初、私は自分の記憶や資料に頼るばかりで、実際の「もの」と向き合えなく、資料では決して得られない生の体験をしてきた他の人達の話を聞いて、とても羨ましく感じました。「ものとの出会い、体で感覚して、行動し、考える」このような体験は、資料よりもずっと価値があり、これを積み重ねていくことは、その人が生きていく糧になるものだと感じ、自分もそんな体験をしてみたいと思いました。

そんな気持ちから、私は、都留の町を散歩することを始めました。車通りの多い国道沿いで並に出会ったり、家の軒下に巣を作るツバメの姿を見かけたりと、偶然の出会いの中に様々な

ムササビの住むキャンパス —フィールド・ミュージアムの夢



発見や喜びがありました。そんな散歩を続け、何気なく十日市場の小篠神社に立ち寄った時、私は、確かな存在感を放ち、境内に佇む巨大な木々に目を奪われました。これらの巨木からは、長い年月を生きてきた貫禄が感じられました。その巨木の中の一本に、ムササビのものとされる、壊れた巣箱がかけられていましたが、そこにムササビが住んでいるような形跡は全く見られませんでした。しかし、私はどうしてもその巣箱が気になり、本当にムササビが住んでいるのか確かめたくなくて、日を改めてムササビの

調査に向かいました。そして、神社の境内でムササビが出てくるのをひたすら待ちました。本来ムササビが活動を始める時間帯になって、彼らが姿を現す気配はありませんでした。「今はもういないのか」と、諦めて帰ろうとしたその時、私が今まで見張っていた木々の辺りから黒い影が飛び出してきました。「ムササビだ！」と思う間もなく、その黒い影は、小篠神社の裏にある墓地の上空を通り、向こうの雑木林へと一直線に飛び去っていききました。あつという間の出来事でしたが、私は全身に

鳥肌が立ち、感動して思わず涙が出ました。私達が暮らす世界の裏に、ムササビが生きる世界が確かに存在していたのです。普段は生活の時間帯がずれているため、人間とムササビが遭遇することはめったにありません。しかし、こうして人間がムササビの時間に合わせてみることで、普段出会うことのない両者の間に交流が生まれる。本当に素晴らしいことだと感じます。今後もムササビの観察を通して、彼らの魅力をどんどん知っていけたらいいなと思います。

散歩こそが 究極のフィールド・ミュージアムの楽しみ

今泉 吉晴

都留の谷を刺し通す西日のすごさには、誰もが驚かされます。晴れた日の夕方、谷底をぬぐ都留市の国道を西に向かうと、真正面から強烈な西日をあびて、目が眩みます。谷すじの西の果てに沈もうとする太陽が、水平に近い光で谷間を満たして顔面を射るからでしょう。この強烈な都留の夕日が、雨後の絶妙な条件をえると、世にも珍しい輝く虹を生みます。

ある日、私は午後の驟雨が去るのを待って大学のグラウンドにでました。空は黒く厚い雲におおわれて、どうじ山（オレンジロード*の西側の山）の陰に入ったグラウンドは薄暗く、早くも夜の気配さえありました。再び雨が降りそうでしたが、私は山小屋に向かうつもりでオレンジロードにでました。そしてキャンパスを振り返った時、東の樂山の上空に鮮やかな虹が浮かびあがったのです。虹は樂山公園から大桑沢へ大きな幅色いアーチをつくり、どす黒い雲を後ろに輝きました。

西をどうじ山に塞がれたオレンジロードからは、西の空はのぞけません。でも、私は、はるかな西の空に晴れ間がのぞき、強烈な西日が国道の谷にそって差し込んで、雨後の樂山の上空で虹を作っているのだ、と直感しました。私は、キャンパスを挟む樂山とどうじ山のいずれよりも高く、東の方角も、西の方角も、広く展望できるウグイスホール前の駐車場に登ってみました。駐車場に立った私は、西の空の雲の一角に晴れ間がのぞき、そこから差す光束が都留の谷をまっすぐに貫いて、樂山の上空の雲にあたって大きな虹の橋をつくっているのを認めました。

あたり全体は依然として厚い雲におおわれて暗く、虹だけが紅色に

片寄った光彩を放ち、その光彩は私の周囲の湿った空気におよんで辺りを虹色に染めていました。私はヘンリー・ディビット・ソローが「虹の橋のたもとに入ったことがある」と書いている「ウォールデン」の文章を思い起こしました。ソローは「私は虹の光の海にいて、ほんのしばらくの間だったにせよ、イルカのくらしを楽しんだ」と続いています。

ジョン・バロースは虹の原理からいって、虹の観察者が虹の橋のたもとに入ることはありえないと批判します。けれどソローほどの散歩の達人が自分の経験を偽って記述するはずはない、と私は考えていました。そして私もまぶしく輝く虹の光で満たされて、なるほど、ソローが経験したことはこのこと、と納得しました。プリズムの原理からは説明できなくとも虹の照り返しはあり得ます。その照り返しをまぶしく感じるほどにふだんの散歩で自然と接して、光のあやにかかわる感覚をみがいてこそ、虹の本当の美しさを経験できるのでしょう。私はソローの経験を今に蘇らせる、都留の自然のすばらしさに全幅の信頼を寄せています。フィールド・ミュージアムとは、究極には散歩の楽しみであり、散歩とは、フィールド・ミュージアムの楽しみと言える、と私は考えています。

*大学の西側に沿ってのびる道



◆大学裏山からみた虹（撮影：北垣憲仁）

地域の知恵に学ぶ

ムササビの観察会のスタイルやわたしたちが考案した身近な野生動物のエンカウンター・スペースは、全国の観察会や観察施設で活用され成果をあげているようです。これらの観察の方法や観察装置は、地域の人々と自然とをつなぐ魅力ある接点となります。しかし、あまり観察装置にたより過ぎると、かえって動物のくらし全体を見なくなる危険性もあります。自然とのいつき合いを目指すフィールド・ミュージアムでは、あらためて地域の人々の暮らしと知恵に学ぶことがこれまでもまして重要であるとわたしたちは考えています。

作業道の復活



歩きやすいように地面の石を組み直す

八つ沢フィールドには、むかしの農業道が馬道とともに残っています。十日市場に住んでおられる中野新作さん（七五）とともに、すでに昨年（二〇〇二年）からその作業道の復活作業に取り組み、約五〇メートルを復元したところ

です。地元の方との七〇年ぶりの協働作業です。この道は、ふだんは水の流れない沢を利用したもので、むやみにほかの土地を踏み荒らさず環境に無理な負荷をかけない、エコロジーな道です。地面の石を組みなおし平らにしておく、大雨で沢に水が流れたさいに石の隙間を土砂が埋め、歩きやすくなります。

この作業道を活用し、月明かりをたよりにキャンパスから八つ沢フィールドまで安全に夜の散策と動物観察が楽しめる工夫もします。たとえば、電源として太陽パネルを使い、作業道の路肩にそって足元をほのかに照らす誘導灯を設置する。これは自然光になるべく近いものとなります。

作業道に石組みをつくっておけば、野ネズミが隙間を利用してすみついてくれるでしょう。そうすれば誘導灯で野ネズミ観察が楽しめます。動物観察だけでなく、オオマツヨイグサやカラスウリなど夜に咲く花を育て、夜の散策ももっと愉快なものにしていきます。



都留で生まれ育った中野新作さん

果樹園は出会いの宝庫



果樹園でのウメの手入れ

都留市十日市場の中屋敷フィールドには、かつて都留の代表的農業の一つであったウメのほかに、モモやクリ、カキなどの果樹園跡があります。放置されてきたこの果樹園の手入れを昨年（二〇〇二年）からはじめました。ここでは収穫はもちろん果樹園にあつまるチョウや哺乳類との出会いが楽しめます。

また、このフィールドには農業用水や飲用水として利用されてきた泉（水場）もあります。簡単な手入れをし、あとは自然の力にまかせるだけでホタルを甦らせ、水を飲みにくるコウモリが飛び交う空間になります。水辺環境の保全のあり方を実地に学ぶ絶好のフィールドです。大型獣の個体数の増加傾向は、先進国共通の現象となつていますが、これは地域社会が地域の自然との密接な関係を失ったあらわれといえるでしょう。イノシシやサルといった大型獣とのうまいつき合い方はどのようにしたらよいのか。そのつき合い方の工夫もこの中屋敷フィールドで実践し提案していきます。

特集

ムササビの住むキャンパス —フィールド・ミュージアムの夢

水掛菜に学ぶ地域の知恵



水掛菜の種まき

水掛菜は都留市の代表的な農作物の一つで、その栽培には豊富な湧き水をうまく利用した知恵が活かされています。都留市がもつ貴重なエコ・ツアーの重要資源といってもいいでしょう。木々の葉や枝を伝い、土や石のあいだをとおろり、さまざまな養分を溶かしながら長い時間をかけて流れでた湧き水が、水稲だけでなく水掛菜の栽培も可能にしています。水掛菜栽培は、まさに自然と人との絶え間ない交流が生みだした財産ともいえるでしょう。

水掛菜栽培は、寒い冬のあいだ、外気温よりも暖かい湧き水を田に流し込むことにより、土地の凍結を防ぎ、また栄養分を補給するという働きを活かしておこなわれ、厳しい寒さがつづく冬場に唯一、栽培可能な青野菜として珍重さ

れてきました。

長年にわたり十日市場で水掛菜栽培をしてこられた清水貞一さん（八〇）にわたしたちは栽培の技を学んでいます。今年（二〇〇三年）はすでに、五月に種取り、一〇月に種まきの様子を見学する観察会を開催しました。参加者のなかには、じっさいにプランターを購入し、種から育てる人や、毎週、大学の行き帰りに畑にたちより生長をつぶさに観察して記録をとる学生もいます。今後も畑に水を張る作業や収穫など、栽培のポイントごとに観察会を開く予定です。今後水掛菜栽培をとおして、湧き水を活かした農業の知恵を学びます。

清水さんに栽培の知恵とすぐれた技を学びながら、湧き水の水源がある「水小屋（地図を参照してください）」でじっさいに水掛菜栽培をはじめました。わたしたちが学ぶ中野新作さんや清水貞一さんも、自然の知恵を自分のものとした最後の人といえるでしょう。時間をかけて育まれた貴重な知恵の数々を今後のフィールド・ミュージアムの活動に活かしていきます。



清水貞一さん

異文化の交流が生み出す 新しい味



都留文科大から歩いて二〇分ほどの高尾町商店街に「ブオーノ」というパスタ専門店のお店があります。岩間美千子さんがこのお店を開いたのは五年ほど前のこと。イタリアで料理の修業を七年ほどして開店の準備をしました。地域を不便なものとしてではなく、魅力あるものとして感じたい。そのためなるべくその土地のものを使いたい。これが岩間さんの大切にしている想いです。

イタリアでは、料理にイラクサを用いるのはごくふつうのことだそうです。さつそく、大学の裏山でイラクサをあつめ、パン粉とセージバターをかけた「カネデルリ」という料理を岩間さんにつくっていただきました。パン生地のご飯と、セイジとバターソースがひきたてるほのかな香りが楽しめる逸品です。

岩間さんは、これからも地域の食材を活かしたパスタ料理を工夫していきたいと考えています。都留にある食材を別の文化で味付けするとおもしろいものができることを、わたしたちは

ブオーノ：〒402-0052 山梨県都留市中央1-4-18 写真は「カネデルリ」

交流をはぐくむ

一九九二年、都留市や山梨県の協力を得て、環境庁の補助事業「いきものふれあいの里」を都留市に誘致するというかたちで、わたしたちのフィールド・ミュージアム運動が実現しました。大学と行政との協力のもとにつくった施設ということになります。今では、ゼミの卒業生がこの施設で学芸員として働いています。また、卒業生のなかには、他県の出身者ですが都留市の小学校の教員となり観察会活動に取り組んでいる人もいます。さらには、地元に戻り地域の人々とともに自然関連の教材の制作をしている卒業生もいます。都留でのフィールド・ミュージアムの成果にヒントを得て、総合学習を実践している教員もいます。フィールド・ミュージアム研究プロジェクトでは、大学だけではなく、自然から学び地域を大切に想い、独自の生き方を実践している方々との交流も深めていきます。

野外博物館をつくる夢

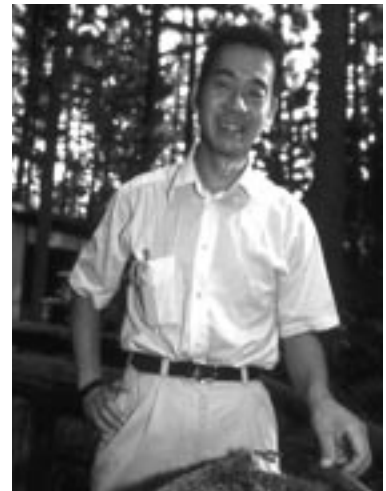
小口尚良 おぐち ひさよし
都留市立立谷村第二小学校教諭

小口尚良さんは、一九八六年に都留文科科大学を卒業し、現在は都留市内にある立谷村第二小学校の教諭として活躍されています。在学中から人間がもつ動物観に関心がありました。

小口さんはもともと島根県の出身ですが、故郷へは帰らず都留で暮らす決心をしました。身近に魅力あふれる自然が残されていること、また人々から自然に関する刺激が豊富に得られるからです。在学中に所属していた「ムササビと森を守る会」では、市内の旭小学校などでムササビ教室を開催したり、平凡社と連携した「アニメマ観察会（ムササビ観察会）」に参加したりしました。また、ムリネモ協議会*では、「うらやま観察会」を立ち上げました。この「うらやま観察会」は、現在でも学生たちに引き継がれています。小口さんは、ゼミで学んだことはもちろんのこと、卒業後の実践を通して独自に自然との関わりのある方を学んできました。

小口さんが大学の裏に観察小屋を建てたのが、いまから一〇年ほど前のことです。プレハブをたて、ムササビ観察用に巣箱を設置し、クルミを植え、池をつくるなど動物たちと出会う森づくりを実践してきました。ここでの発見は小学校の子どもたちにも伝えられます。

小口さんのいまの夢は、この都留に自然の野外博物館をつくること。それも従来の箱物ではなく、生きいきとした野生動物との出会いが楽しめるオリジナルな博物館。森を育てながら着実にその夢が実現しつつあります。



*ムリネモとは、森の動物であるムササビ、リス、ネズミ、モグラの頭文字をとったもの。フィールド・ミュージアムの組織として一九八六年一〇月に発足。

地域と深く結びつく 博物館をめざして

佐藤洋 さとう ひろし
都留市宝のやまふれあいの里ネイチャーセンター学芸員

佐藤洋さんは、一九九六年、都留文科科大学を卒業後すぐに「宝のやまふれあいの里ネイチャーセンター」に学芸員として就職しました。佐藤さんの人生を決定づけたのが、ゼミで設置したムササビの巣箱でした。大学のキャンパス内にある森にムササビの巣箱をかけたところ、ムササビが巣箱に入りました。

さつそく観察にでかけたとき、ムササビの滑空に出会いました。そのダイナミックな滑空が強く印象に残り、卒論はムササビの観察で取り組むことにしたそうです。自然は謎が多く、答



えがすぐにわかりません。そこが魅力と佐藤さんは言います。

そんな佐藤さんが選んだ仕事は学芸員です。都留の森が、怖くて楽しい場所であり、また学ぶ場所であるということを伝えていきたいそうです。そして学校と博物館と地域とが深く結びついたセンターをつくっていきたくともいいます。

いまでは佐藤さんの人柄にひかれてたくさん子どもたちがセンターを訪れます。ある子どもは三年かけて一本のヒノキを使い、手作りの工作をつづけています。また、夏休みに連日、自由研究のために通い、野外観察をする子どももいます。そうした子どもたちが何かを発見したときの笑顔を見るのが嬉しいといいます。それが佐藤さんの大きな自信の源ともなっているのです。

ムササビの住むキャンパス —フィールド・ミュージアムの夢

総合学習で学ぶ 「ドングリと森の小動物の世界」

水戸市立五軒小学校の綿引弘文教諭は、今年4月から「今泉吉晴先生に学ぶ、ドングリと森の小動物の世界」をテーマに4年生の総合学習に取り組んでいます。きっかけは、『子どもたちに愛されたナチュラルストーリー』(今泉吉晴著、福音館書店)でした。すでに教職26年となる綿引さんは、長年にわたり今泉吉晴教授の身近な小動物観察の成果を授業に取り入れてこられました。綿引さんが発行されている「にこにこ」という通信では、アカネズミがクルミを食べた痕跡さがし、教室での野ネズミ観察、野外での観察の構想など、子どもたちがつぎつぎに発見をかさね着想を引き出していく様子がかがえまします。こうした交流もわたしたちのフィールド・ミュージアムの幅を広げ深める貴重な財産です。



写真は「にこにこ」42号。
発見を喜ぶ表情が写真と文から伝わる

交流が生みだした絵本シリーズ

絵本画家のいわむらかずおさんによる『一四ひきシリーズ』は、誕生から20年をむかえました。雑木林の野ネズミ一家を描いた人気シリーズです。じつはこのシリーズ、都留のフィールドで着想を得て出版されたものです。さらに1998年、栃木県馬頭町に開設された「いわむらかずお絵本の丘美術館」にもわたしたちのフィールド・ミュージアムの成果が活かされています。現在まで、いわむらかずお絵本の丘美術館での「ムササビ観察会」や博物館実習生の受け入れなどの交流をかさねてきましたし、今後も地道な交流をつづけていきます。



*いわむらかずお絵本の丘美術館
〒324-0611 栃木県那須郡馬頭町大字小砂 3097

自然との交流を楽しむ

四頁で紹介した「ムササビの森」は、自然にまかせることでヤマハンノキが成長し、ついにその幹にムササビがすめるほどの洞をつくりました。自然にまかせることがすばらしい成果を生むという一例です。また、新たにお金をかけてピオトープをつくるのではなく、キャンパスの自然そのものがピオトープであり、それを楽しむことがもっとも大切であると誰の目にも明らかにしています。キャンパスをもっとも身近で親しみのある場所としてとらえ、自然に関心を向ける楽しさを伝え、誰もが日常的に自然とふれあい、親しむことのできる交流の場所をつくっていきます。



キャンパスの野外解説版。
これも自然との出会いの場所となる



森と人をむすぶために

加藤春樹 かとう はるき
岐阜県郡上八幡町在住 田舎の雑貨販売店経営 文・写真

日本の河川行政のありかたに一石を投じた菅の長良川河口堰建設問題。しかし、長良川上流域では、現在でも局所的な森林破壊が続いています。あれほど、治水の必要性が訴えられていながら、水源の森は、スキー場開発や高速道路の建設で荒廃するばかりです。いま、私(一九九三年に都留文科大を卒業しました)がセルフガイドシステムの企画製作で仕事をしている森では、かつて炭焼き

が盛んに行われていました。今では、炭焼き窯の痕跡も、すっかり森に埋もれ、往時を知る人も少なくなっています。この森と人とを結ぶ関係の糸がまた一つ失われようとしているのです。人々の関心を失った森は、ある特定の利益の犠牲になることがしばしばあります。私は、人々の関心、とりわけ、その森の将来を担う地元の人々と森との関係を、少しでも多く築くことで、森の価値をさまざまな角度から評価してもらおうと考えています。地元の人との協働のなかでそのための教材づくりを目指

しています。昨年の夏、「幸せの青い鳥を探そうハイキング」でこの森を訪れた地元親子グループは、今年もいち早く、木の梢でさえざるオオルリを見つけてきました。オオルリは今でも「幸せの青い鳥」の名で、その美しい姿や声、そして、家族との楽しい思い出とともに彼らの記憶のなかに棲んでいます。この記憶は、彼らがこの森の将来を左右する大きな選択に迫られた時、環境調査報告書に記された何十種類にも及ぶ野鳥の名前の羅列よりも、より重要な判断材料になると私は信じているのです。

情報を記録し、発信する

「本物」との出会いや地域で学んだ知恵をわたしたちの貴重な財産として記録し、発信する。このような考えで発行している月刊誌『フィールド・ノート』。いまでは学科の枠をこえた多数の学生が編集にたずさわっており、フィールド・ミュージアム研究プロジェクトへの参加の窓口の一つになっていきます。編集作業は、交流のあたらしいかたちを創り出すなどフィールド・ミュージアムの幅をさらに広げ、キャンパスを地域にひろげる(フィールド・キャンパス)重要な役割を果たしているのです。



フィールド・ミュージアム編集部のミーティング

編集を通して知った 新しい交流のかたち

高橋ちひろ 文

新しく見つけたことや自分が体験したことを「誰かに話したい」と思ったことはありませんか。フィールド・ノートは「フィールドで発見したことを他の人に分かりやすく伝える」、そんな雑誌です。どんなに小さな発見も書きとめ発信していくという一連の作業は、散歩をしていて素敵なものを見つけたとき、誰かにも教えてあげたいと思う気持ちに近いように感じます。

体験したこと、感じたことをどう言葉に表現するか、始めのうちはそれだけで精一杯です。よりよいものをおもっているうちに、あつという間に発行日が増えてきます。文章やレイアウトに始まり、印刷までの一切を自分たちの手でおこなっている、「納得のいくものをつくる」ことに關しては手を抜きません。何度も校正を繰り返し、文章を練っていきます。おもに取材でお話を伺った方や知人に渡していただいたこれらの雑誌も、現在は大学内や地域の方々とどまらず、県外で毎月楽しみに待っていてくださる方もいらっしやいます。地域での取材を通じて、身近にありながらいまままで通り過ぎていたものに気が付くことも少なくありません。また、交流とは目に見えるもの

けをさすのではなく、じわじわと浸透していくかたちもあることを知りました。自らテーマを決め、取材し、深いことをわかりやすく伝える編集の作業が、ものの理解を確かなものにするということも学びました。忠実に感じたことを言葉にして他人に伝わるかたちにしていくことが新たな交流を生み、読者の方の反応なども含めこちらへ返ってくると思いませんでした。「この記事を書いた人と会ってみたくなた」などと聞いたときは、たとえ自分が担当したところではなくても、続けていてよかったです。心から思える瞬間です。

フィールド・ノートには、二〇名をこえる編集部がたくさんのお話が詰まっています。それは、いち早く見つけた季節の訪れかもしれない、普段は気にもしないような世界のお話かもしれない、かもしれません。

しかし、フィールドでの発見をたくさんの方と共有し、大切にしていきたいという想いは変わりません。新たな交流を楽しみながらこれからもフィールド・ノートの発行を続けていきます。

たかはし ちひろ(本学社会学科三年)



ムササビの住むキャンパス

—フィールド・ミュージアムの夢

地域にこそ花開く 本当の博物館

今泉吉晴

いまいずみ よしはる
本学社会学科教員

二〇年まえ、私が都留の町に移り住んだころ、町では、いたるところガチャガチャという織機がたてる音でいっぱいでした。どの家も織機を動かしている、と思えるほどでした。今、都留の町を歩いて、この特徴ある織機の音を聞くことはまずありません。同じように、二〇年まえ、私が都留の町に移り住んだころ、畑では、いたるところピーチクというヒバリの声に満ちていました。今、都留の畑を歩いて、この特徴あるヒバリの鳴き声を聞くことはまずありません。その一方で、コンビニという風景が出現し、そしてガビチョウの声だかな鳴き声が、当たり前前のサウンドスケープになりました。

私たちの地域に、巨大な変化がたえず起きています。私たちは、身近なものへ関心を払い、そのことによって身近なものとのよき関係を構築しようというフィールド・ミュージアムを提案しています。私たちは、もつとも多くの時間

を過ごす地域にいて、知らず知らずにものごとへの関心を深めています。そのことをフィールド・ミュージアムという形で意識にたえず登らせて、より多くのよき経験を持ち、より豊かなくらしをつくり、私たち自身の感覚をみがいでいくことができることを自ら経験してきました。と同時に、周囲で起こる大きな時代の変化を、まるで手にとるように、生き生きと察知してきたのです。

では、時代の変化とは何でしょうか？ 何が織機の音を消し、ヒバリの鳴き声を消したのでしょうか？ 織機を操作する人が努力しなかった為でも、ヒバリが種としての力を失ったからでもありません。私たちの地域が世界の経済の波をかぶって大きく変化しているのに、地域の外の大きな決定の仕組みがそのことに抵抗しないと決めたからであり、地域に責任があつたわけではありません。しかし、この大きな見取り図を意識し、ヒバリに関心のある人の声に耳を傾けるなら、そして、自分の感覚でヒバリの鳴き声を楽しむなら、私たちがムササビのよさを発見し、ムササビのくらしを守り、森の回復につなげることができたように、ヒバリとよき関係を見失わずに、ヒバ리를絶滅させないですんだかもしれないのです。

私たちの地域では、人間だけでなく、多くの

も のたちが生き生とたえず再生し、よみがえり、風がふき、雨がふって、川をはぐくんできます。多くのものたちが、それぞれに自分たちの存在の仕方にとりもどしています。でも、時代の変化に注文をつけられるのは、私たち人間だけであることに、もつと関心を払うべきでしょう。そのしくみの一部をフィールド・ミュージアムはなうことができる、と私は考えています。

私たちは地域で小さな兆候を楽しみ、感覚と知覚を磨き、慎重に読み、繰り返し経験し、世界に学んで理想を描くことができます。私たちが直接、親しむことができる地域こそ豊かに花開く楽園なのではないでしょうか。フィールド・ミュージアムは楽園のありかを伝える本当の博物館に育っていくでしょう。



キャンパスにすむムササビ

「総合的な学習の時間」のすすめ

佐藤隆 文

「総合学習」への子どもたちの期待に込めよう

いま、大規模におきている子どもたちの「勉強離れ」現象は、学校が今のままですまないことを予感させます。しかし、現時点での学力問題と教育課程についての議論は、子どもたちがなぜ学校や「勉強」から遠ざかろうとしているのかを説明するのではなく、現象として現れている「学力低下」を何とかしなければというところに終始しています。

この点に関わって、先日、興味深い調査結果が文部科学省から発表されました。調査では、二〇〇二年度から導入された「総合的な学習の時間」に対して、「楽しい」「もっと勉強したい」という子どもたちの評価と、「体験や活動させるのが精いっぱい」「たいへん」「基礎・基本の勉強の時間をどう確保するか」というところで悩む教師の評価の大きなギャップに象徴されるように、子どもたちが望む学習を組織し切れてい

ない学校の姿が浮き彫りになっています。この調査では、九割以上の子どもたちが「総合」を「好きだ」と答え、「ふだんできないことが経験できるから」とも述べています。そうだとすると、「勉強離れ」が著しい今の子どもたちが「好きだ」「もっと勉強したい」と言っている「総合」を学校教育全体のなかで位置づけ直し、活用しない手はありません。

わたしたちは、こんなところから始めています

今年度の「地域総合学習開発」プロジェクトでは、こうした現状の分析も含めて「総合学習」とは何かについでに理論研究をおこなっていません。

現在、市内各小・中学校にお願いして、各校で展開されている「総合的な学習の時間」の計画や実践の記録を集めています。すでにいくつかの学校から資料が送られ、整理をしているところですが、各学校の取り組みは予想以上にバラエティに富ん

でいるようです。これらをデータ・ベース化しながら、いくつかの提案をしていこうと考えています。

ところで、このプロジェクトのもう一つのねらいは、今後の教員養成に必要なカリキュラムの核の一つとして、学生をフィールドに連れだし、体験を通じた「自分の問題の発見」を支援することです。先日も付属小学校の「手つなぎ遠足」に参加しました。短い時間でしたが、学生たちは感想で次のように述べていました。

「都留に住んでいながら、こんなに自然があるなんて気がつかなかった」「ただ散歩しただけのような気がするが、それでも気持ちよかったです。また子どもと一緒に話しながら歩きたい」「自分が植物や動物のことを何も知らないということがよくわかった」「子どもは自然に向き合ったときに自分たちでいろいろな感覚を発揮することがわかって勉強になった」などです。

まだまだ「総合」学習にはほど遠



ネイチャーセンターでの総合学習の様子

「俳句の館・風生庵」落成と 「素堂とその系流」展

楠本六男 文

「俳句の館・風生庵」

本年七月十七日、山中湖村文学の森公園で「俳句の館・風生庵」の落成式があった。この文学の森公園には三島由紀夫文学館・徳富蘇峰館がすでにあり、全国的にその存在は知られているわけだが、新たに「俳句の館・風生庵」が併置されたことになる。なだらかな丘陵地に三つの文学館が点在する光景は日本ひろしといえどもここだけであろうし、文学的かおりのただよう特別な場所として推薦しておきたい。

富安風生は、国の官僚として辣腕をふるった人である。そのかたわら「ホトトギス」派の俳人として高浜虚子の指導をうけ、大正から昭和にかけて奥行きのある俳句を次々と発表した人である。

風生は昭和二十八年以降、毎年の夏を避暑地・山中湖村ですごすことになるが、そのために当地には風生率いる俳句結社「若葉」に所属する俳人が多い。そんなゆかりを配慮し

て、遺愛の物品と遺稿類が山中湖に寄贈され、「俳句の館・風生庵」の落成となったわけである。

さて、この事業推進の過程で、展示コーナーの具体的な配置と図録の作成とを依頼された。湖と森の清涼な空気につつまれた風生庵の雰囲気を生かすべく工夫をしたつもりであるが、そのできばえについては実際に足をほんでいただきご確認いただければと思っている。

*問い合わせ先・山中湖村教育委員会

「素堂とその系流」展

毎年、ミュージアム都留で、山梨県にかかわる江戸時代の俳諧活動報告と展示とをこころみている。今年には「素堂とその系流」というテーマで推進。市民へのサービスママとして、七月から十月の第四火曜日に講演が設定されている。今年の場合、七月二十二日には「素堂の関

歴」、八月二十六日には「素堂の作品」、九月二十三日には「研究状況」とこれからの展開」というテーマで、

すでに実施。十月二十八日には「葛飾派の展開」ということで話をする予定である。ほそぼそとした講演ではあるが、市民に定着するまで粘り強く推進していくつもりである。さらに十一月から十二月にかけて展示が開催されるが、こちらの方も成功させたいと思っている。

今回はあまり難解ではなく、図版を使用して一般の人にもわかりやすい展示を考えている。いかにも人的配置の乏しい昨今の博物館事情であるが、数少ない人間で協力しながら、ビジュアルで中身のこい展示にしたいものである。展示資料として、国会図書館蔵『素堂家集』、伊丹の柿衛文庫蔵『通天橋』などを予定しており、充実したものになるうかと想像している。

毎年このような企画を推進しつつ、地域における文化興隆の困難さを感じている。市民に認知されることとがいかにか難しく、さらに地域とともに歩いていくことがいかに困難であることか。しかし、この歩みを止

めてしまったら、何もなかったことになる。

考えてみれば、文化的事業とは常にこんなものであったのかもしれない。社会的な黙殺をもともせず、営々と構築された文化事業こそ意義深いのだといえる。こんなことを思いながら、しめやかに企画を推進し、着々と準備を整えていくしかない。まずは小・中・高校生に対して、大学生や市民が展示を前に説明できるようにになったら、よいのだが。

(くすもとむつお・本学国文学科教員)



山中湖村平野の旧家を移築した「風生庵」
(写真：北垣憲仁)

地元の高校との連携事業進む

畑潤 文

昨年度につづき本年度も、地元の県立桂高校との連携事業がすすんでいます。大学教員による講演などのほか、大学の三号館を使つての「夏休み学習会」も行われ、今年はとくに、国語・社会・英語で、学生が授業経験をもつという試みがなされました（八月一八日～二二日）。また学生たちの自主的な企画として、桂高校の学園祭と都留文科大学の桂川祭（学園祭）とを軸に、相互訪問することが試みられています。

ここでは、すでに終わった二つの講演のことをお伝えします。

一学期に、寺田良一氏（本学教員）が桂高校に出向き、「自然保護から環境ホルモンまで」と題して、環境破壊の実体や、環境汚染物質、各国の環境保護の取り組みなどについて講演しました（六月二三日）。桂高校一年生の約二六〇名が、通常の授業では聞けない内容に接しました。

さらに今泉吉晴氏（本学教員）が、都留文科大学の自然科学棟を使つて、「身近な自然から学ぶこと」と

題して講演し、また、あいにくの天気になりましたが、ムササビの巣箱や木肌の観察会を行いました（七月二五日）。今回は、北垣憲仁氏（本学非常勤講師）のほか、今泉ゼミの学生二名も協力する体制を組んで行われ、桂高校文理科の一年生の約三〇名が参加しました。そのときの生徒の感想文の一部を紹介してみよう。

「話のなかに何度も出てきたセレンディピティという言葉は、最初どういう意味かわからなかったけれど、先生の話は実際に森の中に入ってみたりして少しわかったような気がした。その理由は、自分のなかにセレンディピティがちよつとあるからだと思う。うまく言い表せないけど、そのセレンディピティをこれから大切にしていきたい。」（女子）
「人間は動物を飼っているが、その現状はひどく、飼われていることによってつらい思いをしている動物たちがたくさんいる、ということを

聞いて、改めて人間と動物との関係について考えさせられた。」（女子）
「今泉先生は、ムササビを育てるのに一日中体からはなさず生活をしたと聞き、僕も何かを動物の赤ちゃんから飼うとき、そういう育て方をしたいと思った。」（男子）
「木にムササビの巣を作って保護していた。・・・都留の山はほん

どスギとヒノキ。木肌はほんとうにキレイだった。」（女子）
（猪俣春彦教諭による資料から）
この秋からは、一年生のクラスを対象とした、授業の一環としての講演会と、二年生の全員を対象とした講演会が考えられています。
（はたじゅん・本学社会科学教員）

*セレンディピティ・偶然のなかに価値を見いだす感性

今泉吉晴氏による講演。このあと野外に出て森を観察した



桂高校での寺田良一氏の講演。高校の授業では聞けない内容も魅力の一つ



猪俣春彦（いのまたはるひこ・桂高等学校教諭） 写真

学校現場の問題をともに考える

粕谷貴志 文・写真

教育相談室がスタートして四か月になりました。山梨県内外からの要請を受けて相談活動をおこなってきています。現在までのところでは、電話やファックスによる相談が多く、二七件中二七件となっています。

内容としては学級担任の先生からの学級集団の理解や学級経営の問題についての相談が多く、二七件中二〇件となっています。そのほか、不登校はじめの問題への対応や生徒指導上の問題への対応についての相談（五件）、校内研究・研修についての相談など（二件）もよせられ、学校現場の問題を、先生方とともに考えながら活動を進めています。

教育相談部では、「学習の遅れ」「荒れ」「いじめ」「不登校」「障害」など、さまざまな困難をかかえた子どもたちの理解や対応に悩む先生方、「学級集団の育成や学級経営上の問題」に直面して対応に苦慮している先生方のサポートをすることを目的としています。学校現場の先生方の実践と教育相談部スタッフの専門領域（教育臨床心理学、臨床教育学、障害児教育）

で蓄積されている知見との交流を通して、今日の子どもや学校現場の「問題」を解決する糸口を見つけていく共同作業ができたかと思っています。お気軽にご相談ください。

また、教育相談部では、相談活動のほかにも研修会として、五月十七日に河村茂雄教授（本学大学院）による「Q-Uを用いた学級集団分析と学級集団の育成」を実施しました。現職の先生、卒業生、大学院生、学部生など五〇名をこえる参加があり、学生と現職の先生方をまじえての熱気あふれる研修会になりました。参加者からは、「子どもを理解する視点が広がった。」「具体的な対応について考えるヒントになった。」などの感想がよせられるなど好評でした。この研修会については、次回の開催を希望する声が多く、今年度中に第二回目の研修会を実施する予定です。

そのほか、今後計画されている講座としては、公開教育講座「LD、ADHDの子どものとその指導のあり方を考える」が予定されています。この講座は、一〇月一八日に第一

回目「LD、ADHDの子どものとは—その心理アセスメントを中心に—」前川久男（筑波大学心身障害学系教授）が開かれ、これから、第二回を二月二〇日「LD、ADHD児への学級担任の対応について—事例を通して—」粕谷貴志（都留文科大非常勤講師）、第三回を来年二月二一日「LD、ADHDなどの困難を持つ子どもたちと親のねがい」名月暁子（山梨LDを考える会「いちえ会」代表）に予定しています。講座では、専門研究者、教育相談担当者、親の会といった立場から、LD、ADHD問題についてお話してもらいながら、みなさんからも日頃感じておられる問題を出してもらい、現実に対応した研修にしたいと考えています。詳しくは、都留文科大ホームページ（<http://www.surui.ac.jp/index.html>）をご覧ください。

（かすやたかし・本学非常勤講師）

◆Q-U: Questionnaire-Utilities. 児童生徒一人ひとりの学級生活についての意識を質問紙により測定し、その結果から児

童生徒一人ひとりの援助ニーズと学級集団の様子を知る尺度。

◆LD: 学習障害。知的な遅れはみられないが、読み書き、計算など特定の領域の学習に困難をもつ障害。

◆ADHD: 注意欠陥/多動性障害。不注意、衝動的、落ち着きがないなどの傾向をもち、授業中にすぐに気が散る、じっとしていられない、忘れ物が多い、後先考えずに突っ走る、危険な行動をするなど日常生活に困難をもつ障害。ADHDとLDの両方を持つケースも多い。



具体的な資料や教材をもとに語る前川教授（10月18日）

相談の受付、その他お問い合わせは、
地域交流研究センター教育相談部
Tel & Fax: 0554-45-2411
e-mail: kysoudan@surui.ac.jp
月曜日から土曜日の10時~17時。
ただし、受付は大学の授業開講期間に限ります。

地域に根ざして学ぶ

千葉立也 文・写真

現場からの熱い語りを受けて

八月一日の甲府方面バス見学で、今年度の山梨魅力メッセンジャー講座は全日程を終了した。今年度は、共通教養科目の「歴史と文化Ⅶ」と半ば重なるように運営し、課外講座（都留のまち歩き、課外講演会二回、二回のバス見学）のほか、外部講師をお招きした公開講演を授業のなかで四回実施した。

今年度の公開講演の内容は、甲斐絹（かいき）の伝統を活かしながら環境への負荷を減らすという現代的課題に挑戦する地元企業の試みをお話いただいた「伝統を現代に活かす郡内の地場産業」（前田富男氏）、富士山麓の四季と動物たちの生態、それと対照的な山麓のゴミ問題をスライドで紹介いただき、環境の問題とは何か考えさせられた「富士山の魅力」（中川雄三氏）、山梨ならではのワインづくりへの挑戦とワインにまつわる豊富な話題をお話しいただいた「山梨のワイン」（三澤茂計氏）、そして武田信玄の諸業績を戦国から

近世への歴史の流れのなかにどのように位置づけ、意味づけるかという「信玄と甲州」（平山優氏）というものであった。現場の第一線で活躍されている方々から直接伺う意味は大きく、学生諸君の反応もよかった。

また、七月五日（土）の課外講座では、ご自身がデザインしこれから出品していくという宝石も身近で見せていただいた、ジュエリー・デザイナーの松沢安之氏による「山梨のアクセサリー」、「外部」の魅力ある資源を取り込みながら地域資源を活かそうとアイデアあふれる観光への挑戦を熱く語っていただいた河口湖町長の小佐野常夫氏による「富士五湖の観光開発」、全国一、採取量が多い山梨のミネラルウォーター産業と世界のミネラルウォーターのなかでの富士山麓から採れるものの特長をお話いただいた富士山仙水の田口忠昭氏による「山梨のミネラルウォーター」という多彩なお話を伺った。残念なことに参加者が少なく、熱心にお話しただいた講師の方々には申し訳なかった。

バス見学は、今年度も都留の宝ネイチャーセンターと富士吉田の歴史民俗資料館、環境科学研究所見学というコースと、甲府盆地方面で信玄堤公園、国母工業団地のゼロエミッション事業、ファッション工業団地エリア・デイ・フィレンツェでの甲州印傳製造工程の見学、ワイン用のブドウ栽培とワインテイステイングというコースの二回を実施した（今年度も二〇人をやや上回る程度の参加）。

共感する学びを目指して

今年度はグローバル化する世界の中で地域を学ぶ意義を考えると授業の趣旨を立て、これにメッセンジャー認定講座を組み込んだ。山梨そして都留の、伝統と現代、自然と社会それぞれについて、理解が深まるよう講義と見学を組み合わせ、魅力を感じてもらおうと盛りだくさんのつもりであったが、課外講座への参加は履修者数の三分の一程度であった。「都留を学ぶ、山梨を学ぶ」という意図を伝えきれなかったとい

うことであろう。地域を素材に学ぶというよりは、地域をつくりあげてきた人々の歩みに「共感する学び」が目指されるのだろうが、なかなか簡単にはいかない。関心のある方々との交流ができればありがたい。

最後になるが、講師として講演いただいた方々、バス見学などでお世話になった山梨県産産交流課ビジターズ・インダストリー担当の方々、事務局担当の小林泰憲氏、諸方面のお力添えに心からお礼申し上げます。

（ちばたつや・本学社会学科教員）



勝沼町の中央葡萄酒ブドウ畑で三澤さんから説明を受ける

トピックス

盛況だった 夏の現職教育 講座

今回の現職教育講座は、初等教育

学科に新設された大学院（臨床教育実践学専攻）のスタッフを中心に、「今日の子どもの抱える問題にどう向き合うか」というテーマで八月一日から三日間開催されました。この問題に対する関心の高さを反映して、のべ二七五名の教員が参加しました。

一日目は、田中孝彦教授の「今日の教師と子ども理解の問題」という基調講演と「子ども理解のカンファレンスのすすめ」という提案。二日目は、森博俊教授の「LD、ADHDなどの子どもと学校教育の課題」という講演と、東京の小学校教諭植村芳美氏による実践事例の報告。三日目は河村茂雄教授の「学級崩壊を予防する学級経営のあり方―学級集団分析を通して―」という講演とワークショップが行われました。

いじめ・不登校・自殺・犯罪・学習障害など、子どもをめぐる問題が

多様化・深刻化する中で、臨床教育学や臨床心理学に対する期待は高まっています。参加者からは「来年も継続してほしい」という声がか聞かれました。

文・写真 鶴田清司
(つるたせいじ・本学広報委員長)

学習チューター の活動始まる

文部科学省の事業「放課後学習チューター」制度を活用した実践的試みが、本学と東桂小学校、東桂中学校、都留市教育委員会の連携で準備されてきました。十月より学生チューター四〇余名が各学校に派遣され、本格的な活動を開始しました。

小学校では約八〇名の児童の希望があり、水・木曜日の放課後、小グループに分かれて子どもたちの希望にそった活動が行われています。また、中学では、困難をかかえた生徒の個別的な支援や部活動の指導などが取り組まれています。一方、これらの活動を契機に、中学校ではセンター教育相談部の教員が参加して「子ども理解のカンファレンス」(ケース検討会)も試みられています。文

科省の事業は二〇〇三―〇四年度ですが、この試みを一つの契機にして、地域をベースにした現場と大学の連携した取り組みの発展につなげていければと考えています。

LD・ADHD問題での公開 教育講座(全三回)の開催

今日学校現場で注目されているLDやADHDなどの子どもとその教育についての第一回講座が、一〇月一八日、前川久男先生(筑波大学・心身障害学)をお招きして開かれました。子どもの抱える困難を認知心理過程に焦点をあてて説明し、指導のポイントや教材ソフトを利用した方法を紹介してくださると共に、子どもの動機(やる気)を育てることの重要性などについてお話してくれました。障害は軽度でも抱えている困難は決して軽くはなく、その子に寄り添った援助者の存在が大切だという指摘が印象的でした。参加者からは「『子どものできることから始める』『一人の人として付き合う』ことを念頭に、明日からの子どもとの関わりに活かしていきたい」などの感想が寄せられました。

第二回講座は一二月二〇日(土)、通常学級での事例報告とその

検討を中心に行います。

文 森博俊
(もりひろとし・センター次長)



講演する田中孝彦教授



盛況だった現職教員講座

地域交流センター通信

vol.02

地域交流センター通信 第2号：2003年11月30日発行

編集：都留文科大学地域交流研究センター・通信担当

（今泉吉晴・森博俊・畑潤・北垣憲仁）

発行：都留文科大学地域交流研究センター

〒402-8555 山梨県都留市田原3-8-1 tel.0554-43-4341(代)